

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 76 (1) は, PCN Frontier Review が 1 本, Review Article が 1 本, Regular Article が 1 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

PCN Frontier Review

Trends in big data analyses by multicenter collaborative translational research in psychiatry

T. Onitsuka*, Y. Hirano, K. Nemoto, N. Hashimoto, I. Kushima, D. Koshiyama, M. Koeda, T. Takahashi, Y. Noda, J. Matsumoto, K. Miura, T. Nakazawa, T. Hikida, K. Kasai, N. Ozaki and R. Hashimoto

*Department of Neuroimaging Psychiatry, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan

精神科領域での多施設共同トランスレーショナルリサーチによるビッグデータ解析の潮流

個人あるいは社会的にも大きな損失をもたらす精神疾患の根本的な病態はいまだに解明されておらず, その解明は喫緊の課題である。精神疾患の中核的な病態メカニズムを明らかにするためには, 最新の知見を取り入れた研究室単位での研究に加えて, 大規模なサンプルを用いた研究を行い, その再現性を検証する必要がある。そのためには, 精神医学, 神経科学, 分子生物学, ゲノミクス, 神経画像, 認知科学, 神経生理学, 心理学, 薬理学など, さまざまな分野を横断する多施設共同研究が必須である。さらに, 多施設共同研究は若手研究者の育成にも重要な役割を果たしている。この点では, Enhancing Neuroimaging Genetics through Meta-Analysis (ENIGMA) コンソーシアムや Cognitive Genetics Collaborative Research Organization

(COCORO) が多大な貢献をもたらしている。本レビューでは, まず多施設共同研究の重要性と研究対象となる精神疾患について概観する。次に, COCORO で得られた知見を中心に, 精神疾患の病態生理に関する研究成果を, 神経認知, 神経生理学, 神経画像, 遺伝学, 基礎神経科学の観点から紹介する。今後, このような多施設共同研究が精神疾患の病態解明に貢献することを願っている。

Review Article

Secondary Mania induced by TNF- α inhibitors : A systematic review

A. Miola*, V. D. Porto, N. Meda, G. Perini, M. Solmi and F. Sambataro

*1. Department of Neuroscience, University of Padova, Padova, 2. Padova Neuroscience Center, University of Padova, Padova, 3. Casa di Cura Parco dei Tigli, Padova, Italy

TNF- α 阻害薬により誘発される二次性躁病 : 系統的レビュー

炎症と双極性障害の双方向性の関連を裏づける研究がますます増えている。近年, 腫瘍壊死因子- α (TNF- α) 阻害薬が抑うつ症状の治療薬になりうるとして注目を集めているが, 患者の双極性障害の有無にかかわらず, 気分スイッチの引き金となるリスクについて議論が続いている。よって, 本研究では系統的レビューを行い, TNF- α 薬剤によって誘発された躁病または軽躁病エピソードを検討した。包括的文献検索では, 系統的レビューおよびメタアナリシスのための優先的報告項目ガイドライン (Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta Analyses guidelines) を用い, 上市から 2020 年 11 月までの期間に発表された PubMed, Scopus, Medline および Embase のデータベースの文献をスクリーニングした。最初の 75 件の文

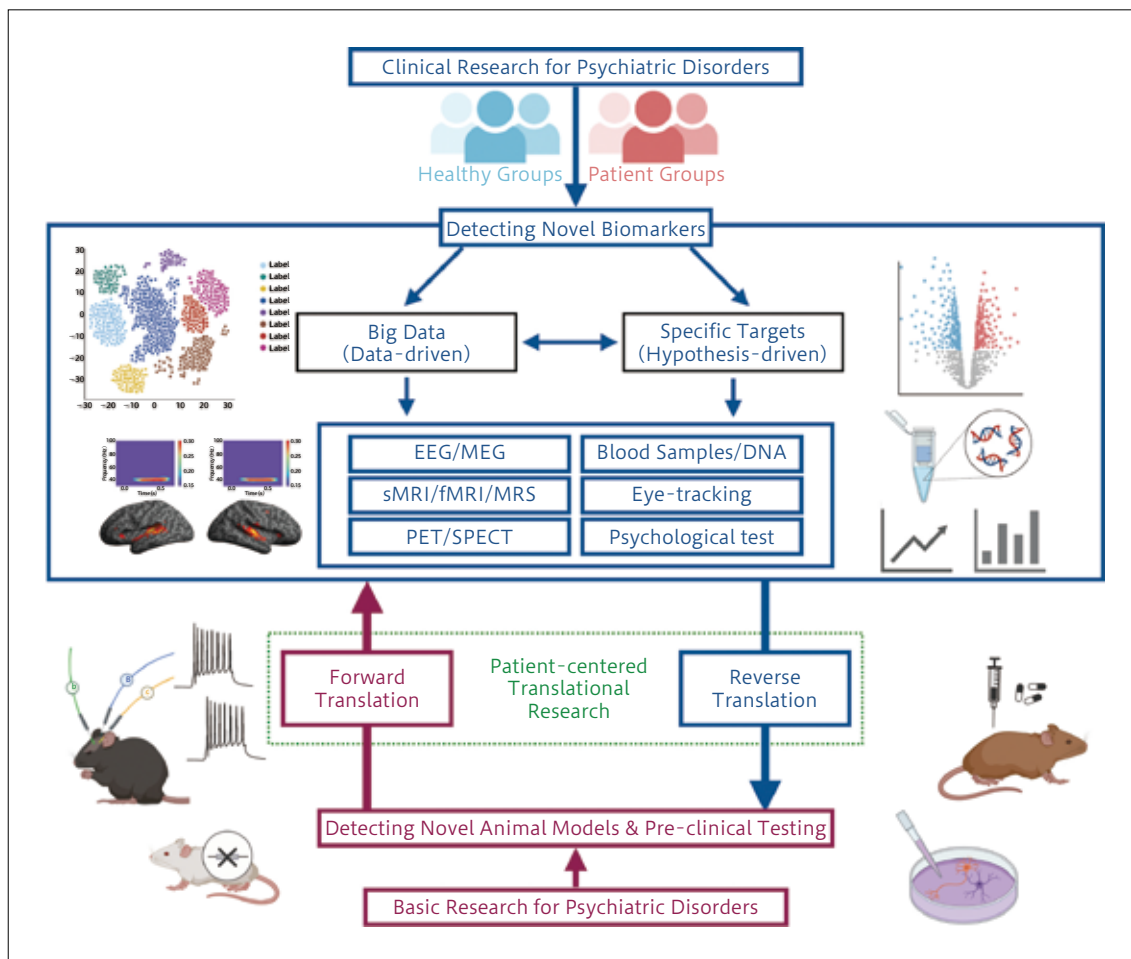


Figure 1 Schematic of bidirectional translational research (forward translation and reverse translation) between clinical research and basic neuroscience in psychiatry. Clinical research needs to detect novel biomarkers, by focusing on specific targets (hypothesis-driven) or using big data (data-driven), that are translatable to basic research. Basic research needs to detect novel animal models that would be useful for preclinical testing. These clinical and basic studies need to be performed bidirectionally through forward translation and reverse translation to achieve patient-centered translational therapeutic research. (Figure made by Yoji Hirano)

(出典：同論文, p.2)

献から、4件の症例報告（それぞれ1例の患者について報告）および1件のコホート研究（この研究では7,600例中40例（0.53%）の患者がインフリキシマブの投与後に高揚気分エピソードを経験）を選定し、本研究に組み入れた。この44例の患者のうち、97.7%が躁病エピソード、2.3%が軽躁病エピソードを経験した。93.2%の患者は精神疾患または向精神薬治療の病歴を有していなかった。気分スペクトラムを伴う精神疾患の病歴を有する患者は6.8%のみであった（気分変調症4.6%および双極性障害2.3%）。躁病または軽躁病症状の発症時期はTNF- α 阻害薬によって異なり、インフリキシマブでは早発、アダリムマブおよびエタネルセプトでは遅発であった。これらの結果から、TNF- α 経路を標的とする薬物治療は、患者の気分障害の

有無にかかわらず躁病エピソードを誘発する可能性があることが示唆される。ただし、前向き研究によって、このような副作用の相対的リスクを評価し、二次性躁病にかかりやすい集団を特定する必要がある。

Discontinuation and remission rates and social functioning in patients with schizophrenia receiving second-generation antipsychotics : 52-week evaluation of JUMPs, a randomized, open-label study

J. Ishigooka*, K. Nakagome, T. Ohmori, N. Iwata, K. Inada, J. Iga, T. Kishi, K. Fujita, Y. Kikuchi, T. Shichijo, H. Tabuse, S. Koretsune, H. Terada, H. Terada, T. Kishimoto, Y. Tsutsumi, Y. Kanda, K. Ohi and K. Sekiyama

*Department of Psychiatry, Tokyo Women's Medical University, School of Medicine, Tokyo, Japan

第二世代抗精神病薬服用中統合失調症患者における中止率，脱落率，および社会機能：ランダム化非盲検試験 JUMPs の 52 週間評価

【目的】世界的に，ある特定の抗精神病薬を統合失調症の維持療法としてガイドラインに一律に推奨するためには，短期試験の結果では不十分である。したがって，社会的リハビリテーションの観点から抗精神病薬の長期的包括的な評価を行うことは，まだ検討されていない薬剤においてとくに必要である。「日本統合失調症薬物治療有用度プログラム (Japan Useful Medi-

cation Program for Schizophrenia : JUMPs)」は，第二世代抗精神病薬 (second-generation antipsychotic : SGA, アリピプラゾール, ブロナンセリン, パリペリドン) の 52 週間の継続性を主要なデータとして示した，大規模かつ長期にわたる自然史研究 (naturalistic study) である。【方法】JUMPs は非盲検，3 群，ランダム化，並行群間，52 週間の試験である。統合失調症患者で，20 歳以上，抗精神病薬治療ないしは前治療薬からの切り替えが必要とされた患者が登録された。主要評価項目は 52 週間における中止率である。副次評価項目は，寛解率，社会機能，生活の質スコア (Personal and Social Performance Scale (PSP) および EuroQol-5 dimensions) と安全性である。【結果】合計で 251 名の患者がアリピプラゾール (n=82)，ブロナンセリン (n=85)，またはパリペリドン (n=84) を服用した。52 週間にわたって，中止率 ($P=0.9771$) と寛解率 ($P>0.05$) は 3 つの治療群間で有意な差はみられなかった。それぞれの中止率はアリピプラゾールで 68.3%，ブロナンセリンで 68.2%，パリペリドンで 65.5% であった。ベースラインからの PSP の有意な改善 (すべて $P<0.05$) は全体コホートおよびブロナンセリン群では単剤化開始時，26 週，52 週でみられ，アリピプラゾール群では 26 週でみられた。有害事象プロファイルはブロナンセリンで好ましかった。【結論】この研究で検討された 3 つの SGA が示した日本の慢性統合失調症患者における治療中止率はすべて同等であった。

2001 年生まれ。2020 年から知的障害や自閉症をもつ人たちが通って制作をする「やまなみ工房」に所属している。彼は、小学 1 年生の頃からはパソコンを使うようになったといういわゆる Z 世代。作品のタイプは、カリグラフィ、パソコンを使った架空の本の表紙や DVD のジャケットのためのグラフィックデザイン、人物が出てくるコマ割りの絵など多様であるが、文字やフォントへの関心をみせる点でそれらは共通する。コマ割りの絵においても、ところどころに、セリフではなくてシーンに映し出されるものとして、文字が出てくる。それゆえに、彼の描くコマ割りは、漫画というよりも、映画の絵コンテのような印象を受ける。しかも、筋書きがあるようでない、ちょっと前衛的な感じのする映画である。

彼が書く文字の綴りは、見たことのないものだが、単語の長さや、2 つの単語でひとまとまりになっていることから察するに、おそらく人名（姓と名）をしばしば書いているということだろう。同じ綴りの姓や名があったりする一方で、同じ姓名は出てこないことから、でたために打っているのではないという推測ができる。また、本の表紙デザインでは Limattin や Carontie という単語が複数回登場しており、これはおそらく出版社の名前（固有名詞）と推測される。最近パワーポイントを駆使してさまざまなフォントやロゴからなる架空の映画のエンディングロールを制作しており、これは上土橋がクリックを押すとちゃんと文字列が流れるようになっている。

(保坂健二郎，滋賀県立美術館)

タイトル：
タイトル不明
(Unknown)



作者：上土橋勇樹 (KAMITSUCHIBASHI Yuki)
制作年：2020

素材：紙，水性染料ペン
サイズ：380×540 mm